

山本梅崖と汪康年の交遊

呂 順 長

(平成19年9月25日受理 最終原稿平成19年12月3日受理)

山本梅崖は大阪事件(1885)の際、檄文「告朝鮮自主檄」を起草し、中国人を痛罵したが、その後欧米列強の中国分割を目の当たりにして、一転して中国に対して大幅の同情を寄せるようになった。1897年9月に彼は中国への旅に出かけ、二ヶ月余にわたり天津、北京、上海、蘇州、漢口などの各地を遊歴し、数多くの人と出会った。それをきっかけに中国人との交遊の輪が広がり、とりわけ当時『時務報』の総理として名が内外に知られた汪康年とは十年以上も交遊を続けた。二人は上海と大阪とで直接会って話し合い、また十年以上も書簡の往復を通じて政治情勢を中心に多岐にわたって意見交換した。さらに山本梅崖は、汪康年の推薦した、中国地方政府の派遣による最初の官費留学生を受け入れ、また汪康年も梅崖の塾生の中国留学に便宜を図った。二人は、幼少から漢学を家学とする環境にあり、成人後も一時的には西洋の学問に興味を示しながらも、漢学を学問の中心に据え、また深く新聞の事業にかかわり、民間人でありながら政治に強い関心を持つなど、多くの共通点があった。さらに自国及び東アジアのために日中が提携すべきとの思いも一致し、それを実践しようとしていた。二人が主張していた日中提携の理念はその後の日本のアジア侵略によって実を結ばなかったが、一世紀以上経ったいまにおいてもその価値を失っていないと思われる。

キーワード：山本梅崖 汪康年 交遊 日中提携 中国人日本留学

はじめに

山本梅崖は明治時代から漢学者として、また一時期は新聞記者として活躍し、中国遊歴紀行の名文『燕山楚水紀遊』¹⁾の著者としても知られる。一方、汪康年は同じ頃に中国の上海で黄遵憲・梁啓超らとともに『時務報』を創刊し、その総理を務め、変法自強を目指して維新運動の宣伝に尽力した人物である。二人は1897年に上海で知り合い、その後も長く書簡のやりとりなどを通じて交遊があった。では、その交遊の実態はどのようなものであったか、二人を結びつけたものは何なのか、『燕山楚水紀遊』、山本梅崖が汪康年に宛てた書簡、汪康年が日本訪問した時の関連記事などを通じて考察してみたい²⁾。

一、山本梅崖と汪康年の略歴

山本梅崖(以下、主として「山本」と略称)は、嘉永五年(1852)儒学者山本澹齋³⁾の孫として土佐藩高岡郡に生まれた。名は憲、号は梅崖、字は永弼、通称は繁太郎、また梅清処主人とも称していた。祖父の山本澹齋は長く佐川領主の深尾氏の開いた藩学「名教館」の学頭を務

め、父山本竹溪（名は璉）も同助教を務めるなど、山本は幼いころから漢学を家学とする環境にあり、3歳で『論語』の勉強を始め、8、9歳で白文が読め、10歳で『左伝』『史記』を読み終え、二十一史を読み始めた。慶応元年（1865、14歳）藩校「至道館」に入り、伊藤山陰・吉田文次・松岡毅軒・竹村東野らに師事し、『資治通鑑』や『易経』などを学び、また明治元年（1868、17歳）には土佐藩の洋学校「開成館」で英語を学び、明治4年（1871、20歳）11月に東京に出て「育英義塾」で洋学を学んだ。その後、明治7年に工部省の電信技師になったが、明治11年に「不屑区区從事末技」（区々として末技に従事するをいさぎよしとせず）として辞めた。明治12年に大阪新報社への入社を皮切りに、『稚児新聞』『中国日日新聞』『北陸自由新聞』などの記者や主筆を務め、自由民権の言論を中心に健筆を奮ったが、何れも長く務めることが出来ず、明治16年に大阪に戻り、生計のため漢学塾の梅清処塾⁵⁾を開いた。しかし、その後も政治への関心が高く、塾での教授の傍ら自由党党员として言論活動を続けた。明治18年（1885）に起きた所謂「大阪事件」⁶⁾に関わり、檄文「告朝鮮自主檄」を起草したりして、「外患罪」で軽禁錮一年監視十ヶ月に処せられ、明治21年に仮出獄し、22年に憲法発布の恩赦により釈放された。その後、主に塾の経営に力を入れるが⁶⁾、その一方で、『愛国新聞』や『東雲新聞』などに記事を書くなど、引き続き政治に関心を示していた。明治37年（1904）、健康のため住居と塾を岡山県牛窓町に移し、そこで昭和3年に生涯を閉じるまで穏やかな晩年を過ごした。死後、その蔵書が岡山県立図書館に寄贈されたが、戦災で焼失した。山本の遺著には『文章規範講義』『訓蒙四書』『史記抄伝講義』『論語私見』『燕山楚水紀遊』『梅清処詠史』『梅清処文鈔』などがあり、梅清処塾からは漢学者川田瑞穂⁷⁾、歌人増田水窓・河西笛州・仲北山、画家菅盾彦らが出た⁸⁾。

汪康年は、字は穰卿、号は毅伯または恢伯、清咸豊十年（1860）浙江省钱塘県（今は杭州市）に生まれた。父は科挙の郷試に合格し、挙人として地方の下級官吏を務めていた。汪康年は幼い頃父から漢学の基礎を学び、その後、正式に師に就いて科挙受験のための学問を学び、1879年に生員（秀才）となった。翌年から郷試を受け始め、数回の落第を経て、1889年には郷試に合格して挙人になり、1892年に会試に合格して進士となった。またその頃、鴉片戦争後に入った西洋の学問にも関心を示したらしく、科挙を受験しながら、ひそかに科挙制度の弊害を批判した。1890年に張之洞の幕下に入り、自強書院編集、両湖書院史学教習などを務めた。1895年には上海強学会に参加し、翌年黄遵憲・梁啓超らとともに『時務報』を創刊し、変法自強を目指して改革運動の宣伝に尽力した。1898年の戊戌政変の失敗後は、改良主義に転じたが、引き続き新聞事業に強い関心を示し、『昌言報』（1898）、『時務日報』（後に『中外日報』に改称、1898）、『京報』（1907）、『芻言報』（1910）などを次々に創刊し、その経営に努めた。1911年に生涯を閉じた。著書に『汪穰卿遺書』『汪穰卿筆記』などがある⁹⁾。

上記の山本と汪康年の経歴から分かるように、二人は幼少から漢学を専修し、成人後も一時的には西洋の学問に興味を示したにもかかわらず、漢学を学問の中心に据え、また新聞の事業に深くかかわり、民間人でありながら政治に強い関心を持つなど、多くの共通点があった。

二、上海での出会い

山本がはじめて汪康年と出会ったのは1897年11月に上海に遊んだ時である。同年9月22日、山本は大阪から出発し中国への旅に出かけた。12月1日に帰国するまで、二ヶ月余り天津、北京、上海、蘇州、漢口などの各地に遊び、数多くの人と出会った。帰国後、旅行中の記録をもとに旅行記『燕山楚水紀遊』を撰し、翌年の夏に刊行している。

この中国旅行の目的について、山本は次のように述べている。昔、朝廷が隋唐と通好し、日本人で彼の地に留学する者が絶えることなく、彼我の交流は緊密であった。しかし、今は官吏と商人のほか、遊学の者がなく、学者はただ書物を調べて、推測で自説を述べるばかりである。(中略)近年、欧米人が次第に横暴に振舞うようになり、ややもすれば虎狼の如く欲望をほしいままにする。日本人たる者は宜しく彼の地に出かけ、広く名士と交遊し、互いに提携し外侮を防ぐ方法を考えるべきである¹⁰⁾。ここから見て取れるように、この遊歴は、ただの観光目的ではなく、日清戦争後の欧米列強の中国分割を目の当たりにし、中国に対して同情の念を抱いた山本が、中国の識者と交遊し、外侮を防ぐ方策をともに探ろうと意図するものでもあった。またこれは時事に強い関心を持つという彼の性格と、漢学者としての彼が中国及び中国の憂国知識人に親近感を持っていたこととも関係があると思われる。

山本は遊歴期間中、数多くの中国滞在中の日本人と会ったほか、知識人を中心に、各地で数多くの中国人と交遊した。旅行記に依拠して、月日・場所・交遊のあった中国人をまとめると、以下ようになる。

- 10月6日 卓(名前は不明、福建の人、刑部で任官、四十二歳)
- 10月14日 栄善、周笠芝、陶彬
- 10月16日 翔振、蒋式惺(以上は北京)
- 10月19日 陶大鈞(天津)
- 10月23日 力鈞
- 10月25日 力鈞、余春亭、陳元、吳瑞卿
- 10月26日 羅振玉、邱憲、章炳麟
- 10月30日 梁啓超、祝秉綱、戴兆悌、汪貽年¹¹⁾、李一琴、汪頌穀(以上は上海)
- 11月8日 金学清、胡鷹青
- 11月9日 力捷三、力鎌(以上は漢口)
- 11月16日 姚文藻、汪庚年¹²⁾、羅振玉
- 11月18日 汪庚年、羅振玉、王惕齋、孫淦、嵇侃
- 10月20日 汪頌徳
- 11月23日 狄葆賢、王錫旗、蒋斧
- 11月24日 汪庚年、張鸞、葉瀚、汪大鈞、曾広鈞¹³⁾、田其田
- 11月25日 葉瀚、湯寿潜、汪庚年、曾広鈞、汪大鈞、汪鐘林、羅振玉、狄葆賢、王錫旗、蒋斧
- 11月26日 汪庚年、羅振玉(以上は上海)

この一覧から見て分かるように、山本が一番長く滞在したのは上海であり、そこでは汪康年と羅振玉を中心に多くの人々と出会っていた。とりわけ汪康年とは短い間に5回も会っている。

山本と汪康年との初めての出会いは、当時上海農会報館に招聘され、主に翻訳の作業に携わっていた藤田豊八の紹介によって実現したものである。山本が旅行記の中で汪康年に対して、「汪子 徳望有り、徵辟に就かず、清節を以て自居す。近日時務報を起して、時事を論じ、該切痛到にして、諸報の魁たり」と述べた上で、二人の間で交わされた会話の内容を次のように記している¹⁴⁾。

汪子 子に謂いて曰く、「窃かに先生の論を聞くに、実に孔教を奉じ、西人の政法を以て之を輔けんと欲す。此の説 弟の意に最も合う。現在の欧州の政の若きは、墨を以て礼と為し、申韓を以て用と為し、一時は頗る効を見すと雖も、之を久しくすれば必ず決裂の憂い有らん。」予曰く、「今日孔教振わざるは、これ諸を日月の食に譬う。何ぞ其の光の復せざるを憂えん。責や吾輩に在らんのみ。」曰く、「敝国は本朝の定鼎より以来、名儒輩出すると雖も、然れども士子往往にして科挙に溺れ、力を本原に致すを知らず。(中略)是を以て人皆苟も利禄を利とし、絶えて畏懼奮発するを知らず。此の事を扶持せんと欲せば、速やかに法を設けて振起するに非ざれば不可なり。」予曰く、「貴国の到る処に聖廟有り、春秋に積奠を行い、此れ孔教を崇奉するに似たり。然れども廟宇頽圯し、荆棘没偕し、乃ち積奠は皆虚飾に属することなからんや。且つ貴国の学者、孔教を称崇すると雖も、其の詩文を觀るに、屢しば神仙等の字を見る。儒者神仙等の字に甘心するは太だ謂われ無しと為す。又葬祭を僧道に托す。夫れ儒者 葬祭は宜しく自ら行うべし。僧道に托するは、甚だ儒者の本領に非ず。如何¹⁵⁾。」

このほかに二人の話題は中国の改革などにも及んでいるが、主には儒学の衰微とその原因、科挙の弊害などを語り合っている。また中国の改革については、孔子の教えを信奉しながら西洋の政法を助けとして導入すべきだという方向で意見が一致している。

二人が二度目に会ったのは二日後の11月18日、汪康年と羅振玉が山本のために開いた歓迎会の場においてである。話の詳細は記録されていないが、参加者は他に、『時務報』と『農会報』で大活躍していた古城貞吉と藤田豊八、一時帰国中の有名な在日華僑王惕齋と孫淦、後に留学生として来日し山本の塾に入門した嵯侃という注目すべきメンバーである。

三回目に会ったのは同24日で、この日、汪康年は山本に友人の張騫、湯寿潜、葉瀚らを紹介しようと、汪自らそれぞれの自宅まで案内している。湯寿潜には不在のため会えなかったが、張騫と葉瀚に会い、山本は彼らと日中の漢学や社会の現状などについて、大いに意見交換した。汪康年も終始同席した。

四回目は翌25日で、この日は葉瀚が山本を招待し、汪康年らも同席した。

五回目は山本が帰国する前日の26日で、山本は汪康年のところを訪ねて別れの挨拶をしてい

る。

このように、山本は上海滞在中、藤田豊八を通じて汪康年と知り合ってから、意気投合し連日のように会っていた。さらに、汪康年は自分の友人を紹介し山本の交遊の輪を一層広げた。その後、山本は維新派の梁啓超などを含め多くの中国人志士と交遊することとなるが、今回の中国遊歴はその重要なきっかけとなったと言える。

三、大阪での再会

山本が日本帰国してから約1ヶ月後、汪康年は日本に向けて出発した。同行者は汪康年のよき協力者として当時『時務報』の記者を務めていた曾広銓である。ちなみに、曾広銓は曾国藩の孫としても広く知られていた人物である。

汪康年のこの訪日について、実弟の汪詒年が、今回の日本訪問には重要な意味があり、日本の政治風俗を調査し、日本の朝野の人士と連携を取るためのものであり、普通の遊歴ではない、と述べているように¹⁶⁾、日本の人士及び在日の中国人志士と連携を取るのが主な目的であった。

汪康年はアジア主義団体として知られる亜細亜協会（1898年に興亜会から改称、後に東亜同文会に合流）に加入し、後にその支部としての上海亜細亜協会の成立にも尽力したほど、西洋列強のアジア進出に強い危機感を持ち、日中提携論に賛同していた。訪日の前から、当時中国で活躍していたアジア主義者の重要人物宗方小太郎などとも交流があり、その影響を受けていたと見られるが、訪日直前に同じ日中提携論者の山本と上海で数回会ったのも訪日を決断した重要なきっかけとなったと思われる。また、折しもドイツが膠州湾を占拠し、欧米列強の中国分割がさらに深刻化していたのも重要な一因であろう。

汪康年一行の日本訪問は当時日本の新聞によって大きく報道された。『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』を調べたところ、『大阪朝日新聞』は1月12日、1月16日、1月17日、1月18日の4回、『大阪毎日新聞』は1月11日、1月12日、1月17日の3回、それぞれ関連記事を発表している。それらの記事によると、汪康年一行の主な訪問地は東京と大阪で、1月2日に東京に着き、同15日に大阪に入り、18日に神戸からインプレス・オブ・インディア号で帰国している。ただ、これらの記事は大阪での活動を中心に記したもので、東京での活動については、東京経済学協会の例会での講演についてしか記されていない。『大阪朝日新聞』1月12日の記事によると、汪康年一行は1月8日¹⁷⁾に東京経済学協会の例会に出席し講演を行なったという。講演会は出席者が六十余名もあり、まず経済協会の代表者が挨拶で、「東洋に国を成せるものは支那と日本との両国にすぎざるを以て将来益々両国人民間の交際を親密にせんことを望む」「彼の戦争の如きは一時政治上の衝突より起りしものにて相互の国民間には決して悪感情を懐くものにあらずとて熱心に彼我交情の温むべき」云々と述べた後、汪康年が中国の貨幣制度の改革について講演した¹⁸⁾。

その後汪康年は15日の夜に大阪に入り、翌朝山本との再会を実現した。山本が自分の塾で日本語を勉強中の留学生汪有齡と嵇侃を連れ、汪の宿泊先の中之嶋六丁目岡田きく方を訪ねたの

である。同席者は他にもまた、汪の同行者曾広銓、当時大阪の川口で貿易を営み、上海で山本と会っている孫淦、蘇杭汽船会社即ち大東新利洋行主の白岩龍平、1897年8月から二回目の来日中の孫文（当時中山樵と名乗り、東京から汪康年らと同行した）、大阪毎日新聞の記者などがいた。その際の汪康年と山本との会話の内容は次のようなものであったと伝えられている。

汪氏 梅崖氏に問うて曰く、山本先生、吾中国膠州の事を聞きて気憤無きを得る乎と。即ち西人の心は東人を殲滅するに非らざれば則ち已まざるなり。今日膠州の事ある識者必ず早く之を察せり。此れ余の中東兩國益す隣交を固うせんことを論ずる所以なり、と梅崖氏の答うるに及びて、汪氏は極めて是し……、弟故に極めて中国の人多く貴国の学校に來たり書を読み、又多く貴国に遊歴して、民人をして彼此相親ましめんことを願うと。又汪氏は貴国人材衆多文武備足せるも、中国の若きは今や則ち誠に……と慷慨せり¹⁹⁾。(旧体字を新体字に改め、句読点を一部加えた。)

このように、二人の会話が主に時局と日中兩國の提携などに集中したことが分かる。1897年11月、ドイツは2人のドイツ人宣教師が殺害されたことを口実に、膠州湾（山東）へ戦艦を派遣し、それを占拠した。その後、清朝政府との交渉で、ドイツは膠州湾を99年間租借することを認めさせた。これが契機となり、ロシアは旅順・大連、フランスは広州湾、イギリスは威海衛・九竜半島を強行租借し、列強の中国分割が進み、中国は植民地へと転落する重大な危機に直面した。汪康年はこの膠州湾事件について山本にその見方を尋ね、山本は列強の侵略に対しては日中兩國が提携し共同で事に当たる必要があると主張し、汪康年の賛同を得たのである。

大阪滞在中、汪康年一行は朝日新聞社を訪問し印刷器械とその運転の模様を見学し²⁰⁾、また東区高等小学校と造幣局も訪問している。

汪康年と山本の大阪での面会は汪康年の日本訪問日程の僅かな一部分に過ぎないが、これが二人の交遊をさらに深める大きなきっかけとなったことはいうまでもない。

四、書簡の往復

山本は自撰の年譜に「客歳清国二遊ビシヨリ清人ト交遊稍広シ。汪穰卿ト信書往来絶エス。」²¹⁾と記しているように、中国遊歴をきっかけに中国人との交遊が増え、とりわけ汪康年とは数ヶ月の間に上海と大阪で二度も面会し、その後も頻繁に書簡のやりとり交遊を深めた。二人の書簡往復は山本が中国遊歴から帰国した直後から十数年間続いたと見られる。現在、汪康年が山本に宛てた書簡は見つからないが、山本が汪康年に宛てた書簡は一部保存され、1889年に上海図書館によって編集された『汪康年師友書札』（四）に収録されている²²⁾。

『汪康年師友書札』に収録されている700余人3000余通の書簡の中に、日本人28人の72通が含まれている。2通以上の者を挙げると、古城貞吉16通、山本憲15通、宗北平6通、樽原陳政4通、河瀬儀4通、佐藤宏3通、松江賢哲2通、白岩竜平2通となり、あとの20人は1通である。16通と一番多い古城貞吉は汪康年の主な協力者で長く『時務報』の日本語翻訳を担当して

いた人物である。二番目に多いのは山本憲の15通であるから、ここからも二人が一時期緊密に連携を取っていたことが分かる。ここで、その中の三通を取り上げてその内容の一斑を窺うことにする。

客日大駕東遊し、^{たま}適たま大阪に留まり、蓬蒿に光顧せらる、弟の栄を荷くこと殊に大なり。但だ草卒にして款待を失い、最も長者を迎うる意に非ず、弟の罪を負うこと亦大なり。然れども幸いに弟の不敏を以^{おも}わらず、帰帆後屢しば手教音問を辱^{ます}くし、又『時務報』を惠賜せらる、隆意殷殷にして、弟実に報いる所を知らず。而れども弟方に貴国の觀光紀行文を草し、即ち書を裁して奉答せず、弟の罪を負うこと是に於いてか益ます大なり。万に闊略する所に在れば、幸甚幸甚たり。草せし所の紀行文は纔^{ようや}く脱稿し、不日にして將に左右に奉呈し、正し教うることを仰がんとす。嵇・汪の二君は語学大いに進み、刮目す可し、請う為に意を安ぜんことを。近日、新聞に俄^{ロシア}人の益ます猖獗なる事を報じ、東亜の形勢日に迫り、真に悶悶たるべし。弊国の伊藤博文方に相と為る。此人の心術は知るべきのみ。何ぞ人の意を強むるの事有るを得んや。前四日、議員の公選が始めて畢り、内閣に反抗する者の数は大半を占む。顧みるに伊藤の相たること久しきを得ざるか。伊藤内閣に代わる者は何人たるかは知る可からず。然れども東亜の形勢を支持するに至りては、之を伊藤に比して必ず見るべき者有らん。時下、世道の為に自重せらるれば是れ荷なり。茲に文安を請い、万に炳鑿を祈る。弟山本憲頓首す。三月十八日²³⁾。

日付は月と日だけで年が記載されていないが、書簡の内容から1898年であることが容易に分かる。汪康年が日本からの帰国後に出した書簡に対する返信である。嵇・汪の二君のことは次節に詳述するが、それ以外の主な話題はやはり東アジアと日本国内の政治情勢に関するものである。

汪先生閣下 向^{さき}者に北京の政変の報に接し、窃かに執事の安否を慮り、直ちに信を昌言報に寄せ以て之を問うも、未だ復書に接せず。然れども新聞の報ずる所に依り、執事の安泰なるを詳悉し、慰甚慰甚たり。窃かに惟るに北京の政変は、実に貴国近日の大事なり。繼ぐに各国の兵の入京するを以てし、貴国此より^{ます}滋ます多事たり。將に如何にして変を生ぜんとするか、東亜の大局に注目する者の痛く憂えて措かざる所なり。弟は不敏なるも私かに思う、貴国に入り、貴国の大家の驥尾に付随し、驚鈍を竭尽し、貴国の革新に従事せんと欲すこと日久し。但だ未だ旅資を獲ず、日を曠しくすること彌いよ久しく、神空しく馳せ、魂徒らに逝くのみ。近日多故の報に接するに及び、益ます技癢に堪えず、日び西に望み咨嗟す。幸わくは憐察されんことを。敬みて道安を請う。弟山本憲頓首す。十月十三日²⁴⁾。

1898年9月21日に戊戌の政変が起き、光緒帝の支持の下、康有為・梁啓超らによって推し進

められた政治改革が中断され、多くの維新志士が捕えられ、厳しい弾圧を受けた。日本では、維新事業の宣伝に身を投じていた汪康年も逮捕されたと一時報じられた。それを知った山本は26日に汪康年の仕事先の『昌言報』社に問い合わせの手紙を送ったが、返事がなく、山本は汪康年の身の安全をかなり心配していた。しかし、後に汪康年逮捕の報道が誤報であったことを知り、10月13日に再度確認の手紙を送った。それがこの手紙である。この中で山本は、今回の政変の影響についての自らの所感を述べ、さらに資金さえ解決できれば再度中国に渡り、中国の維新事業に尽力したいとの決意を語っている。

穰卿先生執事 平日疎懶し、久しく奉問せずして、徒らに愧仰を増すのみ。今年弊国は博覧会を設け、目今各館の諸品の陳列漸く整う。此より十数日の後、春風和暢し、益ます人の身に可し。伏して惟るに羅・葉の諸賢と嵯を泛べて東来し、一瞥を経るを得て、弟將に趨き走りて導きを為さば是れ荷なり。敬みて道安を請う。弟憲頓首す。新三月十九日²⁵。

上記の二通とは違って、政治情勢には触れず、羅振玉・葉瀚と共に博覧会に来観するのを要請したものである。日付は新三月十九日とあるだけで、年の記載はないが、博覧会は大阪の天王寺で行われた第五回内国勸業博覧会のことと思われるので、1903年のことであろう。

山本の汪康年に送った書簡は『汪康年師友書札』収録のものを見る限り、1898年から1909年までのもので、その期間は10年以上にわたっている。その中で1898年のものが一番多く、二人が会ってからの一、二年間にとりわけ頻りに連絡を取り合っていたことを物語っている。また、内容としては、近況の報告と東アジア情勢についての議論が圧倒的に多いが、次のような書簡もある。

汪康年から『時務報』を贈られた山本が、日本の新聞から関心のある記事を漢訳し、『時務報』に提供していたことが書簡に見える²⁶。ただ、筆者が『時務報』を調べたところ、山本梅崖の署名のある訳文が見つからなかった。しかし、羅振玉が設立し汪康年も深くかかわった上海農学会が刊行した『農学報』、『農学叢書』には山本梅崖の訳文が見えている。たとえば、1989年頃に刊行された『農学叢書』第三集には土壌学（日本池田政吉著、山本憲訳）、耕作篇（日本中村鼎撰、川瀬儀太郎訳）、気候論（日本井上甚太郎著、羅振玉訳）、農業保険論（日本吉井東一著、山本憲訳）の四篇の訳文があり、その中の二篇が山本憲訳となっている。また、山本の年譜にも「清人羅振玉ノ為ニ。若干ノ書ヲ訳シ。上海ニ送レリ。」²⁷、「梁啓超ヨリ政治汎論ノ翻訳ヲ囑セラル。」²⁸とある。これらの記録から見れば、山本が自らの漢文力を活かして、当時交遊していた汪康年、羅振玉、梁啓超などのために少なからぬ文章を翻訳していたことが分かる。

清末の中国において阿片が広く吸飲されて、知識人も例外ではなかった。しかし、阿片吸飲はいうまでもなく外聞を憚ることである。前述のように、山本は中国旅行中、汪康年の紹介で当時の著名知識人で実業家の張騫をその自宅に訪ねたことがあった。その時の様子として旅行記『燕山楚水紀遊』の中に「房中具鴉片器」²⁹という記述が見える。これを読んだ汪康年から

指摘を受けての返信であろうか、「張先生家鴉片具之事、奉承來命、鄙著將再刊、再刊必除削」³⁰⁾ というような異色な内容も見られる。中国人がいかにか阿片吸飲を不名誉なことと思っただか、またどれだけ面子を大事にするかがよく分かる。「再刊の際、必ずその内容を削除する」と山本は約束していたが、残念ながらその後再刊されることがなく、張鷟の不面目は今もそのまま残っている。

また、書簡から山本が弟子の田宮春策の中国留学の際、その世話を汪康年に見てもらったことも分かる。田宮春策は具体的にどういう人物がよく分からないが³¹⁾、1901年に上海に渡り、しばらく汪康年と葉瀚の世話のもと中国語を勉強し、その後漢口に渡った。その間に葉瀚との間に何かトラブルがあったらしく、山本が汪康年に謝罪し、田宮を日本に呼び戻すか、または書を致して大いに叱責して、弟子籍から除名すると約束している³²⁾。

五、山本塾に入門した汪康年推薦の中国人留学生

『梅崖先生年譜』に「(明治三十年)十二月。清人嵇侃汪有齡康同文。予ノ門ニ入ル。是ヨリ清人陸続入門ス。」とある。三人の中、康同文については、1896年から1900年まで山本の塾に籍を置いた川田瑞穂は、「(梅崖が)明治三十年支那に遊んだ時から、康有為と相知る仲となり、三十一年彼が亡命して来た時にはこれを世話し、その兄康孟卿、孟卿の子康同文を半年許り塾に預かったことがある」³³⁾と述べている。ここから康同文は康有為の兄(従兄)康孟卿の子であることがわかる。ただ、山本が中国旅行中に康有為と知り合ったという記録は旅行記『燕山楚水紀遊』と『梅崖先生年譜』には見当たらず、上海で面識を得た梁啓超を通じて康有為と知り合った可能性が大きい。また、1898年6月に神戸で創刊された『東亜報』(日本で創刊された最初の中国語新聞とされる)の執筆者として康同文という名前が見られ³⁴⁾、同じ人物ではないかと思われる。

一方、嵇侃と汪有齡は杭州蚕学館から浙江省の官費留学生として派遣された人物である。これについては、いくつか記録があるが、その中に、『農学报』は「(杭州蚕学館)留学生：湖州府徳清県出身の嵇侃と杭州府錢塘出身の汪有齡が丁酉孟冬に赴日。戊戌の夏、汪有齡が浙江巡撫廖中丞の指示により東京で法律を学ぶことになる。現在(嵇侃は)日本東京埼玉県児玉町競進社で養蚕を学ぶ。毎月蚕学館により食費と学費が提供されるほか、さらにそれぞれ月に十円給与される」³⁵⁾と伝えている。杭州蚕学館は中国最初の養蚕技術専門学校として1897年8月頃に杭州で創設されたものであるから、創設早々に日本へ留学生を派遣したわけである。また汪有齡の人は直接汪康年が推薦したと見られる³⁶⁾。

二人が来日後すぐに山本の塾に入門したのは偶然ではなからう。当時、日本への留学は殆ど先例がなく、在日中国人留学生といえ、1896年に駐日公使館が事務通訳の必要から招致した十数名の特別留学生³⁷⁾しかなく、留学生が日本の正式な学校に入学するにはまだいろいろ困難があった。そこで、推薦者の汪康年と協力者の孫滄が、当時交遊のあった山本に頼み、山本から快諾を得たものと思われる。山本が中国旅行中の11月18日に上海で汪康年、羅振玉、王惕齋、孫滄、嵇侃と会ったとき、二人の留学生の受け入れの話がその重要な話題だったと推測され

る。

山本が日本帰国後まもなく、嵇侃と汪有齡が来日し、山本の塾に入った。汪有齡が来日後に汪康年に宛てた書簡によると、(旧暦)11月16日に上海を発ち、22日に神戸に着き、29日に先に来日していた嵇侃と神戸で会い、同じ日に大阪に向かった。嵇侃は21日からすでに山本の塾に入ったが、汪有齡は30日に山本を自宅に尋ね、師事する意を伝え、数日後に正式に入塾した。また、二人とも最初暫くは孫滄の自宅に泊まっていたが、その後、山本塾に住み込んだ³⁸⁾。

1898年4月頃に二人は大阪を離れ、埼玉県児玉町児玉村にある競進社蚕業講習所に入ったから、二人が山本について日本語を勉強したのは4ヶ月ほどであった。前にも触れたが、二人の語学について、山本が3月18日付けの汪康年宛の書簡で「嵇汪の二君は語学が大に進み、刮目すべし」と報告している。短い期間ではあるが、二人が山本について勤勉に語学を勉強していたことを物語っている。

19世紀末に始まった中国人の日本留学は20世紀に入ってから大きなブームとなり、1905年頃には在日中国留学生が一万人前後に達していた。しかし、これまでの研究では、嵇侃と汪有齡が来日した1897年当時における官費派遣留学生は、前述の十数名の公使館特別留学生を除き、嵇侃と汪有齡のほかには存在が確認されていない。したがって、二人は始めて山本塾に入門した中国人留学生として注目されるだけでなく、中国の地方政府が独自に派遣した最初の官費留学生としても大きく注目される。二人の来日は中国各省から多数の留学生が派遣される時代の到来を先取りした存在と言え、その歴史的意味は大きい。

このように、嵇侃と汪有齡の二人が日本留学の先駆けとなった背景には、浙江巡撫廖寿豊・杭州知府林啓らの有力官僚の支持、汪康年・羅振玉ら浙江出身の民間志士の提唱、また在日華商で後に浙江省留学生監督に任命された孫滄の支援、二人の教育を受け入れた山本の協力などが挙げられる。日中間にわたる官・学・財各界の協力の賜物といえよう。

終わりに

山本と交際していた中国人として、前にも少し触れたが、ほかに康有儀(孟卿)、康有為、王照(少雲)などがある。康有儀は康有為の従兄で1898年にしばらく山本の塾に入門したことがあるが、康有為、梁啓超、王照らが日本に亡命した後、大阪を離れて横浜で梁啓超らと共に『清議報』の刊行に携わった³⁹⁾。山本が康有為らを支援するため、1898年9月27日から10月5日、十月下旬から11月4日、1899年3月14日の3回にわたって東京へ行き、10月15日に東京から大阪に戻った後、彼らを救済するためと見られる日清協和会⁴⁰⁾を立ち上げている。1899年の春に、在日中国人教育機関大同学校が孫文の首唱のもと康有為らによって横浜に設立され、山本がその監督への就任を誘われたが、塾との両立ができないと断った。また、日本の外務当局は康有為、梁啓超、王照ら三人の長期日本滞在が外交に悪影響を及ぼすのを恐れ、三人を日本からアメリカへ退去させようと図り、その説得工作を外務省書記官樽原陳政を通じて山本に頼んだことさえある。山本が「窮鳥入懐、獵夫不忍殺之」として断ったが、その話は康有儀を通じて三人に伝えられ、三人は山本に感謝しアメリカへ行くことを約束した。その後、康

有為は日本の外務当局から旅費 1 万 5 千円を得て日本を退去したが、王照と梁啓超は旅費が少ないことを理由に退去しなかった⁴¹⁾。汪康年との交際からだけでなく、康有為らとの交際からも分かるように、山本は中国の維新事業に強い関心を持ち深くかかわった人物であるといえよう。

1885年の大阪事件の際、自由党员としての山本は、朝鮮に政変を起こすことによって宗主国の中国と日本との間に武力衝突を引き起こし、さらに国内の混乱に乗じて政府を転覆しようという構想に大いに賛同し、深くかかわった。彼の起草した檄文「告朝鮮自主檄」は名文とされ、英仏の二ヶ国語に翻訳されて、日本・中国・朝鮮だけではなく欧米の国々にも配信され、大きな影響を引き起こした。しかし、その内容をみると、表現が非常に過激で、「日本の義徒、宇内の人士に檄す」と書き起こし、朝鮮を属国にした清人は「其の罪貫き盈ち、其の悪天に滔る」⁴²⁾「犬羊を性と為し、蠢かなこと豚彘の如く、頑迷にして靈ならず」云々と中国人に対して罵倒の言葉を連ねた⁴²⁾。しかし、日清戦争後、欧米諸国の中国分割を目の当たりにして、彼は一転して中国に対して大きく同情の念を寄せるようになった。これはまことに皮肉な巡りあわせであり、それは中国に対して無法な利権を強要する欧米列強の横暴に対する義憤に起因する⁴³⁾と思われる。また彼は日本の国益も念頭に置きながら、欧米列強に対抗するための日清提携を強く主張した⁴⁴⁾。それは汪康年を含め、交遊のあった多くの中国人からも共鳴を得た。山本と汪康年が列強の中国分割、「戊戌変法」という中国の激動の時期を中心に十数年も交際を続けたのは、二人とも政治情勢に強い関心を持ち、自国及び東アジアのために日中が提携すべきとの思いが一致したからであろう。また二人とも幼少から漢学を学ぶ環境にあり、成人後も漢学を学問の中心に据え、新聞の事業にかかわるといふ経歴とも無関係ではないと思われる。

山本と汪が実践しようとした日中提携の理念はその後の日本のアジア侵略によって実を結ばなかったが、一世紀以上経ったいまにおいてもその価値を失っていないと思われる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、元本学教授の宮本正章先生に『梅崖先生年譜』『梅清処文鈔』など貴重な資料をご提供いただき、有益なご教示をいただきました。また、二名の査読者には本稿を丁寧に読んでいただき、数多くの有益なご指摘をいただきました。ここに記して厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) 明治時代の漢学者の中国旅行記として最も知られているのは、竹添光鴻の『棧雲峡雨日記』、岡千仞の『觀光紀遊』、山本梅崖の『燕山楚水紀遊』であり、あわせて明治時代の三大中国旅行記とされる。
- 2) 山本梅崖の生涯については、増田渉「山本憲(梅崖)」(『西学東漸と中国事情：「雑書」札記』、岩波書店、1979年)、宮本正章「増田水窓(半剣)の文芸と生涯」(『四天王寺国際佛教大学紀要』第32号、1999年)、同「町の漢学者山本パイガイと船場の主人増田水窓」(『日本語日本文化論叢・埴生野』第1号、四天王寺国際佛教大学、2002年)、三浦叶「川田雪山先生談 山本憲先生」(『明治の碩学』所収、汲古選書、2003年)などの先行研究がある。また山本梅崖の中国遊歴については、遠藤光正「山本梅

- 崖の見た日清戦争後の中国 - 燕山楚水紀遊を中心として」(『東洋研究』通号82、1987年2月)がある。本稿は執筆の際、これらの先行研究を参考にした。
- 3) 前掲注2の三浦「川田雪山先生談 山本憲先生」、遠藤「山本梅崖の見た日清戦争後の中国 - 燕山楚水紀遊を中心として」などでは山本澹泊齋とされているが、ここでは『梅崖先生年譜』に従い、山本澹齋とする。
 - 4) 『梅崖先生年譜』によれば、その住所は最初東区鎗屋町にあった。その後、明治18年3月に内九宝寺町、その半月後に谷町一丁目に移った。さらに、明治32年5月にその居を天神橋南に移している。
 - 5) 1885年大井憲太郎を中心とした自由党左派が朝鮮内政改革を企て発覚した事件。朝鮮の改革派を支援し、独立党に政権を掌握させ、これを契機に日本国民の愛国心をあおり、日本国内の政治の改革に結びつけるという発想に基づくものである。実行の前に計画が漏れ、大阪などで139人が逮捕された。
 - 6) 釈放後、大阪事件で一躍人気が上がった梅崖の漢塾は塾生が増え繁盛し、一時藤沢南岳の泊園塾と並び称される存在となり、梅崖本人も藤沢南岳、近藤南洲、五十川訊堂と並んで大阪の四大漢学者と称されるようになったとされる。
 - 7) 1896年から4年間にわたり梅崖塾で学んだ川田瑞穂は後に早大の教授などを歴任し、昭和天皇の終戦詔書を起草した人物としても知られる。
 - 8) 山本梅崖の略歴は主に、『梅崖先生年譜』(昭和6年、非売品)、『近世漢学者伝記著作大辞典』(関儀一郎ほか編、井田書店、1943年)、『大阪人物辞典』(三善貞司編、清文堂、2000年)を参考にした。
 - 9) 汪康年の略歴は主に『汪穰卿(康年)先生伝記遺文』(汪詒年編、文海出版社、1966年)を参考にした。
 - 10) 山本憲著『燕山楚水紀遊』、明治31年、非売品、上冊1 - 2頁。原文：在昔朝廷与隋唐通好，士留学彼地者往来不絶，而彼我隣交亦密。今則官曹商賈之外，絶無往遊。学者但徵諸書中，胸臆抒説而已。(中略)而近年欧米人漸猖獗，動欲逞虎狼之慾。為邦人者，宜遊彼土，広交名士，提挈同仇，以講禦侮之方。(旧体字を新体字に改め、句読点を一部調整した。以下注14、23、24、25も同じである。)
 - 11) 汪康年の実弟の汪詒年の誤りである。
 - 12) 汪康年の誤りである。
 - 13) 曾広銓の誤りである。
 - 14) 山本憲著『燕山楚水紀遊』、明治31年、非売品、下冊31-32頁。原文：汪子有徳望，徴辟不就，以清節自居。近日起時務報，論時事，該切痛到，為諸報魁。汪子謂子曰，窃聞先生之論，欲実奉孔教，而以西人之政法輔之。此説於弟意最合。若現在欧州之政，以墨為礼，以申韓為用，一時雖頗見効，久之必有决裂之憂。予曰，今日孔教不振，譬諸日月之食，何憂其光不復。責也在吾輩耳。曰，敝国自本朝定鼎以来，雖名儒輩出，然士子往往溺於科挙，不知致力於本原。(中略)是以人皆苟利禄，而絶不知畏懼奮發。欲扶持此事，非速設法振起不可。予曰，貴国到处有聖廟，春秋行積奠，此似崇奉孔教。然廟宇頽圯，荆棘没偕，無乃積奠皆属虚飾耶。且貴国学者，雖称崇孔教，觀其詩文，屢見神仙等字。儒者甘心神仙等字，太為無謂。又葬祭托之僧道。夫儒者葬祭宜自行。托之僧道，甚非儒者本領何如。
 - 15) 「何如」の前の句点は原文にはなく、文脈により筆者が加えた。
 - 16) 汪詒年編『汪穰卿(康年)先生伝記・遺文』、文海出版社、1966年、99頁。
 - 17) 『大阪毎日新聞』1月12日の記事では講演が9日に行なわれたと記されている。
 - 18) 『大阪朝日新聞』「清国名士の来遊」、明治31年1月12日。
 - 19) 『大阪毎日新聞』「清国新聞記者」、明治31年1月17日。
 - 20) 汪康年と曾広銓は日本訪問から帰国して数ヵ月後に、二人が中心となって、『時務日報』を創刊した際、当時主流だった一面印刷を両面印刷に改め、また読みやすくするために一行の長さを短くするな

どいろいろ工夫した。これは今回の日本訪問の成果の一つとされる。

- 21) 『梅崖先生年譜』、昭和6年、非売品、31頁。
- 22) 日付がはっきりしていないものがあるが、到着時間順として1 - 15の順番がつけられている。ただし、その内容を見れば順番が間違っているのも一部あるらしい。
- 23) 原文：客日大駕東遊，適留大阪，光顧蓬蒿，弟荷榮殊大。但草卒失款待，最非迎長者之意，弟負罪亦大。然幸不以弟不敏，歸帆後，屢辱手教音問，又惠賜時務報，隆意殷殷，弟實不知所報。而弟方草貴國觀光紀行文，不即裁書奉答，弟負罪於是乎益大矣。万在所闕略，幸甚幸甚。所草紀行文纔脫稿，不日將奉呈左右，仰正教。嵇汪二君語学大進，可刮目，請為安意。近日新聞報俄人益猖獗之事，東亞形勢日迫，真可悶悶。敝國伊藤博文方為相，此人心術可知耳，何得有強人意之事。前四日議員公選始畢，反抗內閣者數占大半，顧伊藤為相不得久歟。代伊藤內閣者不可知為何人。然至支持東亞形勢，比之伊藤必有可見者矣。時下為世道自重是荷，茲請文安，万祈炳鑒。弟山本憲頓首。三月十八日。
- 24) 原文：汪先生閣下 向者接北京政變之報，竊慮執事安否。直寄信昌言報以問之，未接復書。然依新聞所報，詳悉執事安泰，慰甚慰甚。竊惟北京政變，實為貴國近日大事。繼以各國兵入京，貴國從此滋多事。將如何生變，注目東亞大局者所痛憂不措也。弟不敏私思，欲入貴國，附隨貴國大家驥尾，竭盡駑鈍，從事貴國革新者日久矣。但未獲旅資，曠日彌久，神空騁魂徒逝耳。及接近日多故之報，益不堪技癢，日西望咨嗟，幸見憐察，敬請道安。弟山本憲頓首。十月十三日。
- 25) 原文：穰卿先生執事 平日疎懶，久不奉問，徒增愧仰已。今年敝國設博覽會，目今各館諸品陳列漸整。從此十數日之後，春風和暢，益可人身，伏惟與羅葉諸賢泛槎東來，得經一瞥，弟將趨走為導是荷。敬請道安。弟憲頓首。新三月十九日。
- 26) 上海図書館編『汪康年師友書札』(四) 上海古籍出版社、1989年、3296頁。
- 27) 『梅崖先生年譜』、昭和6年、非売品、31頁。
- 28) 同上、33頁。
- 29) 山本憲著『燕山楚水紀遊』、明治31年、非売品、下冊37頁。
- 30) 上海図書館編『汪康年師友書札』(四) 上海古籍出版社、1989年、3297頁。
- 31) 同書簡のなかに、父は医者であるという内容がある。また、『梅崖先生年譜』には大阪で医院を開業していた田宮之春という人物と長く付き合っていたという記録もある。推測ではあるが、田宮之春と田宮春策は父子関係の可能性がある。
- 32) 上海図書館編『汪康年師友書札』(四) 上海古籍出版社、1989年、3298-3299頁。
- 33) 三浦叶『明治の碩学』、汲古書院、2003年、127頁。
- 34) 方漢奇ほか「近代中国新聞事業史事編年(四)」、『新聞と伝播研究』、1982年第2期、178頁。
- 35) 「浙江蚕学館表」、『農学报』第41巻。
- 36) 嵇侃と汪有齡の派遣経緯は拙稿「浙江省による地方官費留日学生派遣の創始」(『浙江と日本』所収、関西大学出版部、1997年4月)を参照されたい。
- 37) これらの学生が正式な意味での留学生かどうかについては諸説がある。
- 38) 上海図書館編『汪康年師友書札』(一) 上海古籍出版社、1986年、1054 - 1056頁。
- 39) 梅崖は康有為に頼まれ、『清議報』に寄稿していた。『清議報』第2号から「梅崖山本憲」と署名した「論東亞事宜」の連載文が見られる。
- 40) 日清協和会設立直後の11月6日に、梁啓超が梅崖に書簡を送り祝賀と感謝の意を伝えている。(1898年11月20日『台湾日日新報』、梁啓超「致大阪日清協和会山本梅崖書」) また、康有為は1899年3月2日に「答山本憲君」の詩の中で「高士山本子，遺經抱蠶蠶。吾兄從之遊，陳義不可翹。(中略)慷慨哀吾難，奔走集其僚。感子蹈海情，痛我風雨候。」(『康有為政論集』上冊、387頁)と梅崖の努力に対

して賛意を表している。

- 41) 『梅崖先生年譜』、昭和6年、非売品、31 - 32頁。
- 42) 同上、20 - 21頁。
- 43) 遠藤光正「山本梅崖の見た日清戦争後の中国 - 「燕山楚水紀遊」を中心として」、『東洋研究』通号82、1987年2月、60頁。
- 44) 『梅崖先生年譜』に、「(明治二十七年)是歳朝鮮ノ事ヲ以テ清国ト罽端ヲ開ク。予当路者二意見書ヲ致ス者数次。」「(明治三十三年)清国義和団匪乱起。我邦及英俄佛独米伊諸国各発兵。至天津。入北京。予致書於山縣総理大臣青木外務大臣。以テ清国扶植ノ大計ヲ完クスベキヲ切論セリ。」「(明治三十六年)六月七月九月十月四次。致書桂総理小村外務。論外務。」「(明治三十八年)秋。客歳開仗。予致書於桂総理小村外務。論事者数次。且言宜責割地。不宜賠款。」(上記の引用文で漢文と和文が混ざっているが、原文のままである)などの記載がある。その意見書がいまだ見つからないが、もしその詳しい内容が分かれば、梅崖の日清提携の真意をいっそう明らかにすることができると思う。さらなる史料調査を含め今後の課題にしたい。